

令和 6 年 3 月 1 日

福岡県教育委員会教育長 殿

所属校名 水巻町立頃末小学校
職・氏名 教諭 宮原 瞳
指導者名 教諭 横田 純也

研 修 最 終 報 告 書

このたび、長期派遣研修員として、下記のとおり研修をしましたので報告いたします。

記

- 1 研修種別 C 福岡教育大学附属福岡小学校研修員
- 2 研修場所及び所在地 福岡教育大学附属福岡小学校
〒810-0061 福岡市中央区西公園 12 番 1 号
TEL (092) 741-4731
FAX (092) 741-4744

3 研究主題及び副題

達成感を味わう生活単元学習
～思いの実現が繰り返しできる単元構成を通して～

4 研究内容の概要

(1) 主題の意味

達成感を味わうとは、思いが実現したときに、得られる喜びを実感することである。思いとは、「〇〇をしたい」「よりよいものにしたい」といった、活動の中で目的達成を志向する気持ちである。喜びを実感する条件は、①「思い通りのものができた」「自分の力でできた」といった自己の学習を振り返り実感する自己評価、②「喜んでもらえた」「人の役に立った」といった他者から称賛される他者評価で実感することの2つである。

達成感を味わう生活単元学習とは、思いの実現を繰り返し、「自分でできた」「(具体物が)完成した」「喜んでもらえて嬉しい」と何度も喜びを感じる学習のことである。始めに子供がもった単元のゴール像(目的の達成)に向かって活動し、思いが実現したときに、自己評価・他者評価を通して達成感を味わうことができる。また、単元を通して目的意識をもち続けることで単元の最後に目的を達成することができたという大きな達成感を味わうことができる。そこで、本研究では、以下のような子供の姿を目指す。

- | | |
|---|----------------|
| ○ 活動や体験を繰り返す中で、自分のできることを増やしたり、得意なことを伸ばしたりすることができる子供 | (知識及び技能) |
| ○ 目的や思いに応じた材料や道具を選んだり試したりして、繰り返し活動に取り組むことができる子供 | (思考力、判断力、表現力等) |
| ○ 自信をもって学習に取り組んだり、進んで活動に取り組んだりして、自分の力でやり遂げたことと他者が喜んでいることを繰り返し実感する子供 | (学びに向かう力、人間性等) |

(2) 副題の意味

思いの実現が繰り返しできるとは、子供が思いにあった材料・道具を選んだり、操作したり、作り上げたりする中で、思いが実現したことを実感し、新たな思いが生まれたり、思いが深まったりして

いくことを何度も繰り返すことである。

思いの実現が繰り返しできる単元構成とは、生活単元学習において、次の3つの段階から単元を構成することである。子供が単元の目的を設定する志向段階、子供が思いを実現する実現段階、子供が目的を達成する達成段階の3つである。志向段階では、単元を貫く目的意識をもたせるために、子供と話し合いながら目的を設定する。実現段階では、子供が主体的に活動し、思いの実現を繰り返すことができるようにするために、学習経験や生活経験を基に子供が自分の力で思いを実現する環境を設定する。また、思いの実現を繰り返し実感させるために、自己評価・他者評価を行う。達成段階では、目的の達成を実感させるために、学習の成果の視覚化と他者評価を行う。このように単元を構成することで、単元の最後に大きな達成感を味わうことができる。

(3) 仮説実証のための着眼

ア 単元を貫く目的意識をもたせるための視覚化

単元を貫く目的意識をもたせるために、単元全体の流れと学びの記録を視覚化した学びのマップの提示を行う。目的の達成に向けて行う活動や、活動の中で頑張ったことを視覚化することで、単元を通して目的意識を持続させることができる。その結果、本時で何をすることが明確になり、子供に思いをもたせることができる。また、単元を通して目的意識を貫くことで、子供の思いを強化したり、意欲を高めたりすることができ、主体的に活動に取り組むことができる。

イ 思いを実現できる環境構成

思いを実現できる環境構成とは、子供が思いを実現できる複数の材料・道具を選択できるように場を設定することである。子供が使う材料・道具を選定するときには、子供の学習経験やできるようになったことを基にして考える必要がある。選定する際の条件は3つある。①実態把握を行い、学習内容や生活経験を踏まえ、子供が安全に取り扱うことができるもの、②子供が自分の力で操作することができる作業量や難易度のもの、③複数の材料・道具を組み合わせること

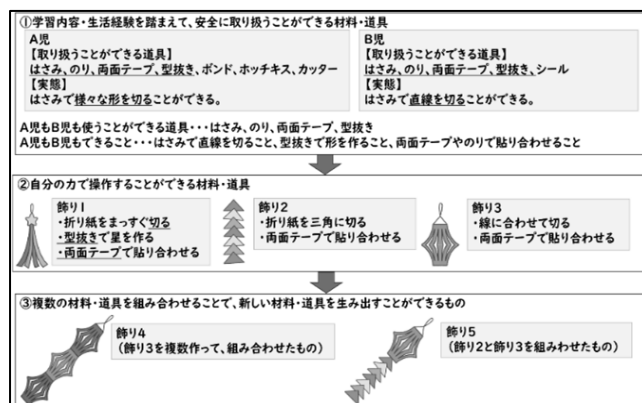


図1 材料・道具の選定例

ことで、新しい材料・道具を生み出すことが可能であるもの、である。これらの条件を基に、図1に示すような手順で材料・道具を用意することで、子供は学習経験や生活経験を基に自分の力で思いを実現することができるようになり、繰り返し活動に取り組んだり、目的意識をもち続けて単元の学習を進めたりできる。

ウ 視覚化した成果を基に行う自己評価・他者評価

自己評価を行うときには、自分の頑張りを振り返り、視覚的に分かる形で表出させる活動を設定する。教師が具体物を用いて、材料・道具を選択した理由を詳しく尋ねることで、子供が自分の頑張りを言語化して自覚したり、子供自身が味わった達成感を他者と共有したりできるようにする。他者評価を行うときには、課題の達成度が分かるように学習の成果を視覚化し、友達や教師から称賛をもらう振り返り活動を設定する。友達や教師は、視覚化した活動の成果を基に子供の頑張りを、前時からの成長を称賛することができる。終末場面では、子供の活動全体が分かる写真を基に、友達や教師以外の第三者から称賛をもらう活動を設定する。また、単元の流れが分かる写真や第三者からの手紙などを使って、子供自身が単元全体を振り返る活動を設定する。これらの活動により、思いが実現できたと実感することができ、達成感を味わうことに繋がる。

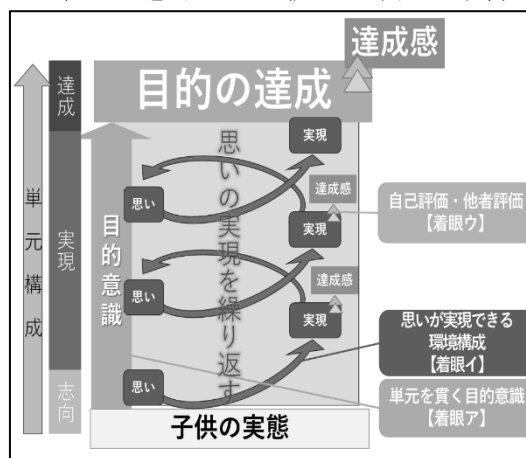


図2 研究構想図

これらの活動により、思いが実現できたと実感することができ、達成感を味わうことに繋がる。

(4) 指導の実際（10月実証）

ア 単元名 第3・4学年さくら組 ハロウィンパーティーをしよう！

イ 単元の見標

- 手順書を見て衣装やプレゼントを作ったり、買い物に必要なやり取りをしたりすることができる。
(知識及び技能)
- アンケートを基にお家の人が喜ぶ衣装やプレゼントを考え、よりよいものにすることができる。
(思考力、判断力、表現力等)
- 活動の成果を他者に伝えたり、他者から評価を聞いたりして喜びを味わい、自分の気持ちを他者に伝えることができる。
(学びに向かう力、人間性等)

ウ 計画（14時間）

- (ア) お家の人にアンケートを取り、ハロウィンパーティーの計画を立てる。———1時間＋課外
- (イ) ハロウィンパーティーの準備をする。———11時間
- (ウ) ハロウィンパーティーをしたり、振り返りをする。———2時間

エ 単元の仮説

第3・4学年さくら組「ハロウィンパーティーをしよう！」の学習において、次の手立てを行えば、達成感を味わう子供が育つであろう。

- 「お家の人をパーティーに招待して喜ばせる」という目的意識をもたせるためのハロウィンパーティーまでの単元の流れと学びの記録の視覚化【着眼ア】
- 子供の実態に合わせて選定した材料・道具、手順書などの思いを実現できる環境構成【着眼イ】
- 本時の成果を捉えるために、前時と本時を視覚的に比較する自己評価や、友達・保護者からの他者評価【着眼ウ】

オ 指導の実際

本学級は3年生3人、4年生2人からなる特別支援学級である。友達のために作品を作ったり、作った作品で一緒に遊んだりした経験がある。そこで、国語科や図画工作科での学びや、これまでの生活経験でできるようになったことを生かして、お家の人のために作品を作り、お家の人から評価されることで達成感を味わう授業を構想した。

(ア) 志向段階（1／14時間）

志向段階では、「お家の人をパーティーに招待して喜ばせたい」という目的意識をもつことをねらいとした。単元の流れを視覚化した学びのマップを、教師と一緒に作った【着眼ア】。前年度の活動や4月からの学習経験を想起できるように写真を提示すると、写真を見た子供は、「僕が買ってきたお菓子を、お母さんと食べたい。」「プレゼントを作って渡したい。」などと発言し、それを基に

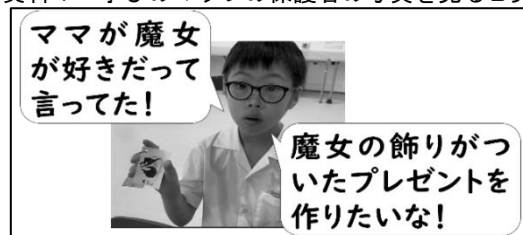
学びのマップを作成した。完成した学びのマップを見て、「お家の人と早くパーティーがしたい。」と発言する姿が見られた（資料1）。また、お家の人へのアンケート（好きなキャラクター・色・飾り・お菓子）を実施すると、その回答を見た子供は、資料2のように発言していた。

考察1

志向段階において、目的意識をもたせるために、お家の人に子供が自分でアンケートをとったり、単元の流れを視覚化した学びのマップを掲示したりしたことは有効であった。その根拠は、資料1や資料2の子供の発言のように、単元の目的を理解して見通しをもったり、お家の人を喜ばせるためにどのような飾りを作りたいか、思いをもったりすることができたからである。また、展開段階においても、どのような飾りを作りたいか考える時に、アンケート結果を活用する姿も見られ、目的意識の持続に繋がった。



資料1 学びのマップの保護者の写真を見るB児



資料2 アンケート結果を伝えるB児

(イ) 実現段階（2～11／14 時間）

実現段階では、「プレゼントを作りたい」「招待状を渡したい」という思いの実現を繰り返すことをねらいとした。そのために、材料を自分で選ぶことができる場を設定した【着眼イ】。飾りを選ぶ時に理由を尋ねると、「ママがピンクが好きだから。」という発言がみられた（資料3）。また、材料を選ぶ上でお家の人アンケートを活用し、お家の人々が喜ぶ飾りを作りたいという思いの実現に向けて活動に取り組む姿が見られた。

活動の最後に自己評価・他者評価を行った【着眼ウ】。自己の頑張りを自覚化したり、他者から称賛をもらったりすることをねらいとした。テレビに映した前時の写真を見て、「前の時間は黒猫だけだったけど、今日はハートの飾りをたくさん作りました。」というように、前時のプレゼントと比較しながら本時の成果を発表する姿が見られた（資料4）。

考察2

実現段階において、飾りを選ぶ場面を設定したことは、子供が「お家の人々が喜ぶプレゼントを作りたい」という思いを実現する上で有効であった。その根拠は、資料3、4の子供の発言のように、アンケートを基に飾りを選んだり、学習の成果を振り返ったりして、思いの実現を実感できたからである。しかし、アンケートの内容が具体的であったため、アンケートと飾りを対応させているだけの子供の姿が見られ、思いの実現をすることが不十分だった場面があった。アンケート内容の検討が必要である。また、振り返りをする時に、前時との違いが分かるように写真を提示したことは、子供が達成感を味わう上で有効であった。一方で、自己の成果を発表する時に、表出が苦手な子供もいた。自己評価を行う際に、自己の頑張りが思いが実現できたことが視覚的にわかるようにする等の手立ての検討が必要である。

(ロ) 達成段階（12～14／14 時間）

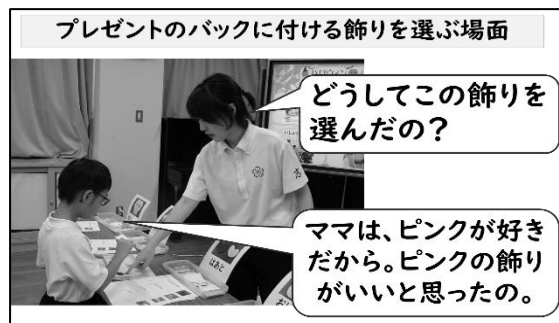
達成段階では、「お家の人をパーティーに招待して喜ばせたい」という目的の達成を実感することをねらいとした。そこで、パーティーにお家の人を招待し、プレゼントやお菓子を渡す活動を行った。子供が頑張ったこと・工夫したところを発表して、お家の人々に嬉しかったことをインタビューした（資料5）【着眼ウ】。お家の人々のアンケートを基にしてプレゼントや飾りを作ったことを伝え、お家の人々が喜ぶ姿を見て、達成感を味わう姿が見られた。

考察3

達成段階で、パーティーをする活動を行った。その中で、お家の人から称賛をもらう活動を設定したことは達成感を味わう上で有効であった。お家の人から称賛をもらったことで、「お家の人々が喜んでくれた」ということを実感し、笑顔になったりハイタッチしたりする姿から見られたためである。

カ 全体考察

資料2では、思いの実現に向けて目的意識をもち、友達やお家の人から称賛されたことで喜ぶ姿が見られた。これは、目的意識をもって活動を進め、自己評価・他者評価を繰り返し行ったためと考える。したがって、達成感を味わう上で、自己評価・他者評価は有効であったことが分かる。しかし、材料を選ぶ場面において、思いの実現をすることは不十分であった。これはアンケートが具体的な内容であり、選択でなく対応させて選ぶ形になったからだと考える。アンケートの内容を抽象化することで、子供が思いを実現できる活動を設定することが必要と考える。



資料3 アンケート結果を見ながら飾りを選ぶB児



資料4 前時の写真と比較して自己評価をするE児



資料5 お家の人に自己の頑張りを伝え、称賛をもらうB児

(5) 指導の実際（12月実証）

ア 単元名 第3・4学年さくら組 ありがとうをとどけよう！—サンタさん大作戦—

イ 単元の見標

- 手順書を見てプレゼントやメッセージカードを作ることができる。（知識及び技能）
- アンケートを基に教師が喜ぶプレゼントやメッセージカードを考え、グループの友達と協力しながら、プレゼントをより良いものにすることができる。（思考力、判断力、表現力等）
- 活動の成果を他者に伝えたり、他者から評価を聞いたりして達成感を味わい、自分の気持ちを他者に伝えることができる。（学びに向かう力、人間性等）

ウ 計画（10時間）

- (ア) 教師にインタビューに行き、どんなプレゼントを作るか計画を立てる。—————2時間
- (イ) メッセージカードやプレゼントを作って渡す。—————7時間＋課外（本時6／7）
- (ウ) 教師からのメッセージ動画を見て、振り返り活動を行う。—————1時間

エ 単元の仮説

第3・4学年さくら組「ありがとうをとどけよう！—サンタさん大作戦—」の学習において、次の手立てを行えば、達成感を味わう子供が育つであろう。

- 「先生が喜ぶプレゼントを渡したい」という目的意識をもたせるための単元の流れと学びの記録の視覚化【着眼ア】
- 子供の実態に合わせて選定した材料・道具、手順書などの思いを実現できる環境構成【着眼イ】
- 視覚化した成果を基に行う自己評価と、それに対する教師からの他者評価【着眼ウ】

オ 指導の実際

12月実証は、10月実証の課題である「思いの実現」ができるようにした。アンケートの内容を抽象化し、グループでの話し合いの時に、思いの表出ができる場を設定した。アンケートを基に作りたい飾りを考え、グループの友達と協力してプレゼントを作る姿を目指した。

(ア) 志向段階（2／10時間）

志向段階では、目的意識をもつことをねらいとした。今までの活動を振り返ったり、クリスマスの絵本の読み聞かせをしたりする活動を設定した。さらに、単元の流れを共有するために、学びのマップを作る活動を設定した【着眼ア】（資料6）。子供たちは、北校舎の先生達が日常生活の中で使うものがよいと考え、「写真立て」「ペン立て」を作ることを決めた。北校舎の先生達にインタビューをして、好きな飾りを調べた。



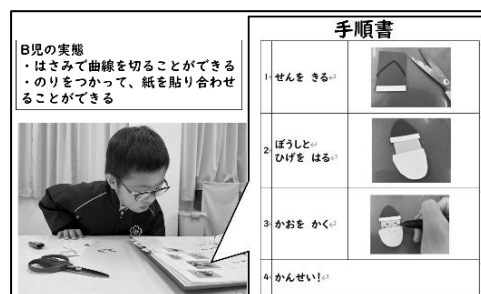
資料6 学びのマップを作る様子

考察1

志向段階において、「北校舎の先生達に感謝の気持ちを届ける」という目的意識をもつために、前単元の学習を振り返ったり、学びのマップを教師と一緒に作ったりしたことは有効であった。その根拠は、資料6のように単元の目的を理解して見通しをもち、北校舎の先生達を喜ばせるためにどのような飾りを作りたいか、思いをもつことができたからである。また、実現段階においても、どのような飾りを作りたいか考える時に、アンケート結果を活用する姿も見られ、目的意識の持続に繋がった。

(イ) 実現段階（3～9／10時間＋課外）

実現段階では、思いの実現を繰り返すことをねらいとした。グループで話し合うときに、アンケートを基にどの飾りを作るか考えて、思いを伝え合う姿が見られた。また、飾りの材料は、図画工作科の学習内容を基に、5人全員が操作できるもの、手順書を読み自分の力で作ることができるものを用意した【着眼イ】（資料7）。北校舎の先生達にプレゼントを渡すときには、思いの実現を実感するために、「どの飾りを



資料7 B児の実態と飾りの手順書の例

作ったのか」「なぜその飾りを作ったのか」を子供が説明するようにした。言語化することが難しい子供には、ホワイトボード（資料8）を活用し、飾りのメニューや自己評価の花丸マークを指さすなどの方法を提示した【着眼ウ】（資料9）。

考察2

実現段階で思いをもつために、話し合いの場面において、抽象化したアンケートを提示したことは、有効であった。その根拠は、資料9のように、「〇〇先生はかっこいい飾りが好きだから、サンタの飾りを作りました。」と自分の思いを話す姿からわかる。また、他者評価においても、ホワイトボードを活用したことは、有効であった【着眼ウ】。言語化が難しい子供も、ホワイトボードに自分の思いが視覚化されたことで、自分の頑張りを伝えることができ（資料9）、自己評価に対して北校舎の先生たちからの確に称賛してもらうことができた。

（ウ）達成段階（10／10 時間）

達成段階では、『北校舎の先生達に感謝の気持ちを届ける』という目的の達成を実感することをねらいとした。学びのマップで単元全体の振り返りをしたり、北校舎の先生達がもらったプレゼントを日常生活の中で使っている様子がわかるお礼の動画を視聴したりした【着眼ウ】（資料10）。

考察3

達成段階で、目的の達成を実感するために、ペン立てや写真立てを日常生活の中で使っていることがわかる動画を視聴したことは有効であった。「自分達が作ったものが、先生達の役に立つことができた」「喜んでもらうことができた」とわかり、子供たちが動画を見て、笑ったり拍手をしたりして喜ぶ姿から分かる（資料10）。

カ 全体考察

本単元で達成感を味わう子供の姿とは、作ったプレゼントを褒めてもらい喜ぶ姿であった。子供たちは、北校舎の先生達に自己の頑張りを伝えたり（資料9）、称賛をもらったりすることで、喜ぶ姿が見られた。これは、学習の成果をホワイトボードで視覚化して教師に伝えたことで、子供の自己評価に対して他者評価をもらえたためと考える。また、達成段階で視聴した北校舎の先生達からのお礼の動画には、子供たちが作ったペン立てや写真立てを日常的に使う様子を紹介してもらった。このことは、子供たちが「先生達の役に立った」という自己有用感を実感することにも繋がった（資料10）。

5 研究の成果と課題

(1) 成果

- 他者に自己の頑張りを伝えることができるようにするために、アンケートの掲示や、花丸マークを貼って行う自己評価等、自己の頑張りを他者に伝えるためのツールを複数用意したことは有効であった。思いの実現を繰り返すことで、単元の最後に大きな達成感を味わうことができた。

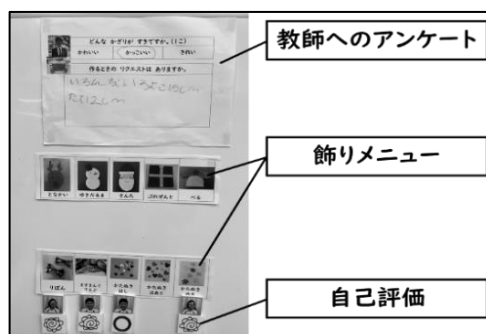
(2) 課題

- 子供がもつ思いは、単元の中で変容するものであることを踏まえ、単元の計画を子供と一緒に見直す機会を作る必要がある。視覚化した単元の流れの活用の仕方をさらに広げていきたい。

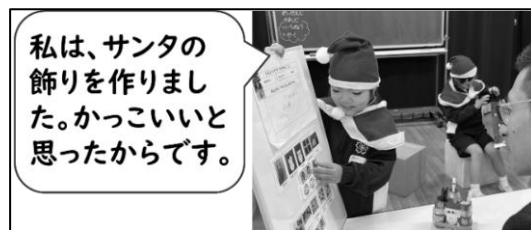
6 研修を修了しての感想

特別支援教育の奥深さ、素晴らしさを実感した1年でした。子供たちが強みを生かしながら、自立や社会参加していくことができるよう、今後も特別支援教育を学び続けていきたいです。

備考 ○ 在籍校と電話番号 水巻町立頃末小学校 TEL (093)201-6066



資料8 実現段階で活用したホワイトボード



資料9 ホワイトボードを使って説明するC児



資料10 お礼の動画を視聴するA児、B児